

令和3年12月23日(木)

生徒の皆さん、おはようございます。校長の野澤です。感染症の拡大が一時的にせよ収まっている今のうちに、放送ではない式典を行いたいと思い、先生方をお願いして、昨日は表彰式を、今日は終業式を開いて頂きました。もちろん、事前に県教育委員会の了承も得ています。こうして全校生徒が集合して対面の式典を行うのは、およそ2年ぶりでしょうか。

式典は切れ目ない日常生活の中に、意図的に不連続な区切りを入れて、気持ちを改めたりモチベーションを高めたりする行事です。おのずとその場の雰囲気は、厳粛で堅苦しいものになりますし、参加者にはその場に相応しい服装や身だしなみが要求されます。結婚式に普段着やジャージで参列したら、周囲からどう思われるでしょうか。嫌がらせで式を台無しにしたいのだ、と軽蔑されると思いませんか。また、自分の好みで奇抜なデザインの服やアクセサリを身に着ける人も、場の空気を読めないと見下されるに違いありません。今朝は、こうした意味を込めて、各担任の先生から身だしなみの御指導があったのではないのでしょうか。あなたは、その指導を正しく受け止めた身なりをしていますか。

さて、初めから皆さんに苦言を呈するようなお話になってしまいましたが、もう1つだけ言わせてください。最近、残念に思っていることがあります。昨日、生徒指導主事の先生から御講話がありましたが、本校の生徒指導の3本柱は、「時間を守る」、「身なりを正す」、そして「挨拶をする」です。朝の登校時間帯には、多くの先生方が昇降口周辺や裏門で挨拶の声掛けをしています。私も、正門で同じことをしていますが、なかなか大きな声で挨拶が返ってきません。私の「おはようございます。」という言葉に、せめてははっきり聞こえるくらいの返事が欲しい、と思うのは贅沢でしょうか。中には黙ってコクリと首を曲げるだけの人、横目でちらりと視線を送るだけの人もおり、あまつさえ、完全に無視してとおり過ぎる生徒もいます。

挨拶は、人として最も基本的なコミュニケーションであり、マナーだと思います。挨拶をしないのは、相手に背を向けることと同じです。「背と背を向い合わせると、お互いの顔を隔てる距離は地球一回り分」という例えを聞いたことがあります。お互いの心の距離が4万キロも離れていたのでは分かり合えるはずもなく、ましてや「何か力になりたい。」などとは思えないでしょう。挨拶をしないということは、自分の理解者や応援団を失う近道ではありませんか。しっかりとした挨拶の習慣が、この白井高校全体に広がっていくことを切に望んでいます。

今年度は、4月当初から優れた成績を収める各部活動の活躍が目を引きました。それはもちろん本校の誇りであり、宝でもあります。ただ、コロナ禍で歌うことを極端に制限された環境の中でも、好きな道をあきらめることなく、先日の白井市民音楽祭で、わずか3人になりながら立派に歌った合唱部を、私は同じくらい誇りに感じています。一途な思いで頑張る生徒、そこにひたむきさと強さを感じさせる生徒、我が白井高校は、そんな生徒が集まる学校だと思えてきます。そうした意味では、多くの縛りがある中で一生懸命に工夫を凝らし、青藍祭を完遂した全校生徒もまた、私の誇りとするところなのです。

念願だった対面での式典が実現した嬉しさから、少々、とりとめのないお話をしてしまいました。どうぞ健康に気を付けて、皆さん、良いお年をお迎えください。終わります。